第3部 近代山水画への道程 —海上派系の作家たち—

清末の 19 世紀、アヘン戦争を契機に外国へ開かれた新興都市である上海では、多くの商人が活躍しました。その経済力に引き寄せられるように、芸術家たちもまた上海に集り、盛んに創作活動を行いました。「海上派」と呼ばれる彼らの顧客は、それまでの高踏的知識人ではなく、一般庶民でしたので、描かれる山水画も、より親しみやすいものとなってゆきます。

30

31

32

33

34

30 | 観潮図

張熊（1803 ～ 1866） 李振先（生卒年未詳・清時代後期）

咸豊 4 年（1854） 紙本淡彩

観峰館蔵

張熊は、字を子祥、号を鴛湖外史といい、清末の画家。浙江秀水の人。長く上海に流寓して画名を馳せた。李振先は、字を咏梅といい、清末民国期の画家。江蘇鎮江の人。本作は、画面右手、海上に突き出た岩場に建つ、松に囲まれた家屋の二階から、激しい波浪を眺める人物を描く。また、家屋に続く道には、この人物を訪ねる人々もいる。岩山や家屋などは李振先によるもので、所々に淡い代赭が用いられているが、張熊による海水は、墨線と淡墨のみを用いて、激しい波浪を見事に表現している。

31 | 西泠散歩図

呉滔（1840 ～ 1895）

同治 9 年（1870） 紙本淡彩

観峰館蔵

呉滔は、字を伯滔といい、清末の画家。浙江崇徳の人。山水をよくした。太平天国の乱により上海に避難し、その後は上海と杭州を往来して売画で生活した。本作は、浙江省杭州の名勝である西湖の北部に築かれた「白堤」を散歩する人物を描く。画面右端に見える橋は「断橋」で、湖水を距てた山に突き出ているのは、宝石山上の「保俶塔」であろう。淡彩による描写が、風光明媚で心地よい気候の名勝をよく表現している。

32 | 山水図

虚谷（1824 ～ 1896）

清時代・19 世紀 紙本淡彩

観峰館蔵

虚谷は、俗姓を朱、原名を懐仁といい、清末の画僧。安徽歙県の人。青年時代は揚州に住み、出家後は蘇州・揚州・上海を行き来しながら書画に専念した。その画は、鋭利な筆線を特徴とする。本作は、前景と中景の樹木の生える岩場の間に、釣り糸を垂らす人物が乗る舟が浮かぶ水面を、さらに、遥か遠景に連なる山々を描く。渇筆を多用した簡潔な墨線に、中間色による穏やかな淡彩を調和させた、詩情を感じさせる作品である。王翬の弟子で、やはり画僧であった姚濤の筆意に倣うとある。

33 | 河陽叢樹図

陸恢（1851 ～ 1920）

清末～民国・19 ～ 20 世紀頃 紙本淡彩

観峰館蔵

陸恢は、原名を友恢、字を廉夫、号を狷叟といい、清末民国期の画家。江蘇蘇州の人。日清戦争従軍後に上海に出て画業に従事した。呉派の伝統を受け継ぎつつ、新しい画風を開いた。本作は、近景に紅葉した樹木に囲まれた家屋と、その二階から外を眺める人物を配し、江水を挟んだ対岸の家屋の奥に、樹林と霞に隔てられて聳える主山を描く。渇筆を塗り重ねるような岩肌の表現と、代赭などの淡い色彩の中に、紅葉の赤がひと際目を引き、秋山の情緒を感じさせる。

34 | 野水寒塘図

姚鍾葆（1882 ～ 1927）

光緒 32 年（1906） 紙本淡彩

観峰館蔵

姚鍾葆は、字を叔平といい、清末民国期の画家。江蘇呉県の人。上海で活躍し、山水をよくした。はじめは細緻な画風であったが、のちに簡略な筆致によって、より気品や風格を重んじる画風となった。本作は、水辺の家屋を手前に配し、中景に小高い岩山と四阿を、そして霞を距てて聳える山々を描く。略筆による墨線と、混じりあうごく淡い色彩が、朦朧とした雰囲気を与える。題の「寒塘」とは、寒々とした水辺のことであるが、芽吹き始めた柳の木が、遠からぬ春の訪れを感じさせる。

35

36

37

35 | 合作山水図

張大千・（1899 ～ 1983）・曾熙（1861 ～ 1930）・程璋（1869 ～ 1938）

民国 13 年（1924）　紙本淡彩
観峰館蔵

本作は、張大千・曾熙・程璋の三名による合作の山水図。張大千は、字を季爰といい、大千の号で知られる。四川内江の人。中国近代を代表する画家の一人。上海で、著名な書家である曾熙などに書画を学んで成功した。本作は、手前に大胆に梅の幹を配し、靄に見え隠れする船の帆を挟んで、張り出す岩山を描く。張大千が上海で活動していた際に、師の曾熙や、海上派の画家である程璋と共に制作したものだが、主要部分は張大千によると考えられる。為書にある薇閣とは、揚洲の名門一族出身で収蔵家でもある卞綍昌のこと。

36 | 蜀棧暁蒲行図

呉淑娟（1853 ～ 1930）

清末～民国・19 ～ 20 世紀頃　絹本着色
観峰館蔵

呉淑娟は、号を杏芬女子といい、清末民国期の女流画家。安徽歙県の人。画家であった父の薫陶を受け、嫁ぎ先が所蔵する名蹟に学んで画技を高めた。上海で活躍し、著名な書画家であり篆刻家の呉昌碩とともに「二呉」と称された。本作は、画面手前より、山間に設けられた木製の道を旅する人々が、さらに険しい山に向かって進むさまを描く。画題の「蜀棧」とは、四川省の険峻な山間に木材を組んで造られた道で、古来よりよく画題に選ばれる。直線的に表現された山の輪郭や瀑布が、鮮やかな色彩と相まって近代的な息吹を感じさせる。

37 | 倣唐寅草屋蒲団図

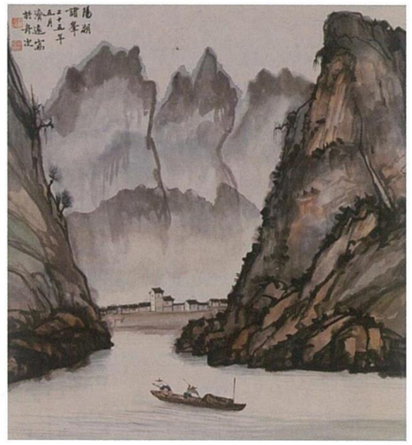
馮超然（1882 ～ 1954）

民国 8 年（1919）　紙本淡彩
観峰館蔵

馮超然は、原名を迥といい、字の超然で通る。近代の画家。江蘇常州の人。上海で育ち、幼い頃から絵画を学んだ。始めは明の唐寅などに倣い、のちに五代の董源・巨然それぞれの長所を取り入れた山水を描いた。本作は、明・唐寅の「草屋蒲団図」（現遼寧省博物館蔵）の臨模作品。瀑布が落ち、霧がたちこめる山間の草屋に、膝を抱えて座布団に座る人物が、橋を渡って本を運び来る童子に目を向けているようすを描く。構図は原画にかなり忠実であるが、軽妙な筆致や明るい色彩に、近代絵画の雰囲気が漂う。

38

39



40

38 | 倣呉鎮松泉図

呉湖帆（1894 ～ 1968）

民国 23 年（1934）　紙本淡彩
観峰館蔵

呉湖帆は、原名を倩といい、近代を代表する画家であり美術教育者・コレクター。著名な文人である呉大澂の孫。上海で山水を陸恢に学び、また古典作品の臨模により画技を高めた。本作は、瀑布の落ちる岩場に雄々しく幹を伸ばす松の巨木を描く。贋より、元・呉鎮の「松泉図」（現南京博物館蔵）を臨模したものと知られる。ただ、原画とは、おおよその構図は共通するが、表現や筆法は独自のものである。単に古典の模倣にとどまらず、自身の画境を切り開く呉湖帆の画学の一斑が垣間見られる作品である。

39 | 山水図

兪剣華（1895 ～ 1979）

民国 24 年（1935）　紙本淡彩
観峰館蔵

兪剣華は、原名を琨といい、字の剣華で通る。近代の画家であり美術教育者。山東済南の人。北京で画を学び、のち長く上海に寄居した。もっとも山水画を得意としたが、むしろ中国美術史論の研究功績で知られる。本作は、画面手前の岩山と渓流に挟まれた道を、松に囲まれた山間の屋敷を訪ねようと供を連れて進む人物を描く。屋敷の背後には霞を距てて主山が積み重なるように聳え、その中腹にも建物が見える。俗塵から離れた山間に良友を訪ねる「訪友図」は伝統的画題である。

40 | 陽朔諸峰図

王済遠（1893 ～ 1975）

民国 25 年（1936）　紙本着色
観峰館蔵

王済遠は、近代の画家であり美術教育者。江蘇武進の人。張大千らと交流を持った。上海にて西洋画を学び、美術学校で教鞭を執った。またアメリカに渡り、伝統的な中国絵画や書法を教授した。本作は、漓江西岸に位置し、カルスト地形に属する秀麗な自然景観で知られる広西チワン族自治区桂林の名勝・陽朔の風景を描く。構図や山肌の表現は伝統的山水画を基礎としながら、彩色に水彩画の技法が取り入れられており、それが清澄な空気感を醸し出している。